



魔法使いの夜

丘の上には魔法使いがいる。――千鶴がそんな噂を聞いたのは、今から三年前のことだった。町の外れには、町全体を見渡せる高い丘があり、古びた教会が建っている。今はもう使われなくなったその教会には、二人の美しい魔法使いが住んでおり、姿を見た者は命を奪われてしまうという。

噂は当時の町で盛んにささやかれ、見目麗しい魔法使いを一目見ようと、多くの人々が丘に押しかけていった。だが知られている限り、その誰一人として魔法使いを目撃することも、命を奪われることもなく、無事に帰ってきた。

当時小学五年生だった千鶴もその一人だった。好奇心旺盛だった千鶴は噂を聞きつけると、クラスの友人たちと丘に登ってみた。

学校から一時間ほどのところにあるその丘には、確かに古びた教会が建っていた。だが、何度ノックしても、引っぱっても、その扉が開くことはなかった。窓から見える教会の中は寂れており、何者かが住んでいる様子は感じられなかった。他に丘の上にあったのは、魔法使いを探しにやってきた人が捨てたと思われるごみだけ。意気揚々とやってきた千鶴は、泣く泣く丘を後にしたのだった。

それから次第に、その噂は聞かれなくなっていった。隣町の中学校に進学し、魔法使いを捜しに丘に登ったことさえ忘れていた千鶴が再びその噂を耳にしたのは、それから三年後のことだった。

「ねえ知ってる？ 隣町の丘の上には教会があって、二人のきれいな魔法使いが住んでるんだって。だけどその姿を見た者は、口封じに殺されてしまうんだって」

夏休みの一日前。終業式が終わり、下校しようとしていた千鶴を、遥香が呼び止めた。

「はい？」

足を止め、きょとんとした表情をする千鶴。

あまりに突拍子もない内容のせいかな。あるいはそんな噂があったことさえ、完全に忘れていたせいかな。千鶴は即座には返すべき言葉が見つからなかった。

遥香はそんな千鶴の手をとると、

「ねえ、今日から暇じゃん。魔法使い捜しに行こうよ？ 田村君も行くって言ってるよ」

遥香は千鶴の一年生のころからの友人だ。入学して初めてのクラスで席が隣だったのをきっかけにつきあい始め、二年生の今も同じクラスだ。

手を引く遥香に、以前、自分が魔法使いを捜しに丘に登ったことを思い出した千鶴は、首を振った。

「ああ。そのことなら、丘の上に魔法使いなんていないわ」

せっかくの提案を一蹴されたことが不満だったのか、遥香は頬をふくらませた。

「むっ。そんなの行ってみないと分からないでしょうが。田村君も現に見た人がいるって言ってたよ」

田村とは千鶴たちと同じクラスの生徒だ。座席の近い遥香とは仲がよいようだが、千鶴はあまり交流がなかった。

千鶴が言った。

「見ると殺されるなら、何で見た人がいるのよ？」

意表をつかれた顔をする遥香。

「え？ ……あ、それもそうだね」

千鶴の手を放す遥香。

だがすぐにポンと手を打つと、

「あ、でも見てすぐ携帯で誰かに人に伝えて、その後に殺されたって可能性もあるんじゃない？」

「携帯を使って連絡するいとまを与えてる時点で、魔法使いと呼ぶに値しないと思うんだけど」

むむ、と押し黙る遥香。遥香はどうしても千鶴と魔法使い捜しに行きたいらしく、引き下がる気配を見せない。

呆れた様子 of 千鶴が言った。

「それに、私も小学生のころ丘に登ってみたけど、魔法使いなんていなかったわ」

「えっ、そうなの？」

「ええ。私、その隣町の出身だけど、小学生のころ同じような噂が流れて、友達と一緒に上ってみたの。だけど、あったのと言えば古びた教会くらい。見たところ中はもぬけの空だし、魔法使いなんて影も形もなかったわ」

「へ～、そうだったんだ。前からあったんだ、そういう噂」

ちょうどそのとき、遥香の後ろの方から足音が聞こえてきた。遥香が振り返ってみると、田村が鞆を抱え、こちらに走ってきていた。

「いやあ、遅れてすまん。忘れ物しちまって」

息を切らす田村に、遥香が言った。

「大丈夫だよ。だけど、遠藤さんが言うには魔法使いはいないって」

千鶴の言ったことを説明する遥香。それを聞いた田村は、千鶴に向き直ると、

「いつごろ上ったの？」

「そうね。小学生のころだから、もう三、四年前かしら」

「いや、そうじゃなくて時間」

人差し指を口元に当てる千鶴。

「時間？ ええと、丘の上についたのがたしか正午だったと思うわ」

「ああ。それじゃだめなんだよ」惜しそうな顔をする田村。「魔法使いは夜にならないと現れないんだ。夜の魔法使いっていう種類らしいからな」

「あっそ」

呆れた千鶴は適当にうなずくと、

「じゃあ、私はこれで」

遥香に言った。

だが歩き始めた千鶴は、すぐに遥香に手を引っぱられた。遥香は千鶴の耳に口を近づけると、「一緒に来てよ。夜遅く行くんだよ？ 田村君頼りないから、お化けとか出たら怖いじゃん」お化けも魔法使いも似たようなものじゃないかと思いつつ、千鶴が遥香に耳打ちした。

「だったら行かなきゃいいじゃない」

「でもほんとにいたら大発見だよ？ 撮影してネコネコ動画にアップロードすれば、再生回数百万回いくかもしれないよ？」

千鶴は呆れた顔で、

「はあ。何を企んでるのよ、あんたは……」

「いやいや、もしそうなれば魔法使いの発見者である私のもとには取材が殺到。新聞やテレビにも取り上げられ、一躍人気となった私は晴れて芸能人としてデビューを――」

「できないって」

「そんなこと分らないもん。実際にネコ動からデビューした人いるもん」

頬をふくらませる遥香。

「そもそも、あんたにどんな芸ができるっていうのよ？」

「あらあら、知らないの？ 私ダンスうまいのよ。去年の学芸祭で踊ったときなんか、ステージの前に人だかりができて、それはもう大変な騒ぎだったんだから」

昨年の学芸祭に遥香が出たのは千鶴も知っていた。だがステージ前に大量の男子生徒が集まったのは、遥香のダンスがうまかったからというより、遥香のスカートが短かったからであることも知っていた。

千鶴は溜息をつくとき、

「大丈夫よ。私が行ったときはお化けもいなかったわ。行きたいなら二人で行けばいいじゃない」

「ええ～、不安だよ」

千鶴は遥香の手を放し、踵を返した。

遥香はその後を追い、耳打ちした。

「じゃあ、こういうのはどう？ もし来てくれたら、清水君と別れてあげてもいいよ」

「えっ」

一瞬、言葉を失った千鶴。足を止め、その場に立ちつくす。

清水は千鶴や遥香と同じクラスの生徒だ。千鶴は一年生のころから恋心を抱いていた。だが、それは千春かも同じだったらしく、気づけば千鶴よりも遥香が先につきあい始めてしまっていたのだった。

千鶴は遥香はおろか誰にも、自らが清水が好きだと言ったことはなかった。にもかかわらず、それを友人であり恋敵である遥香に見破られた千鶴は、驚きのあまり何も言えずにいた。

千鶴が言った。

「いつもあんたを見てれば分かるわ。好きなんでしょ、清水君？ なんなら次は千鶴とつき合うようにし向けてあげてもいいのよ」

「……そ、そんなことできるの？」

遥香に耳打ちする千鶴。

「簡単じゃない。まず私が辛くあたって、清水君を傷つける。そこであんたが優しい言葉をかければ、清水君はあんたに惚れるわ」

それはかわいそうでは？ と思った千鶴。

遥香が続けた。

「清水君は優しいわよ。この前私の誕生日にブランドの時計くれたし。でも私はそんなに好きじゃなくて、単に金目当てだったから、あんたがほしいって言うなら、あげてもいいのよ」

千鶴はしばらく考えた後、

「わかったわよ」

千鶴がそう決めたのは、そこまでしても清水とつき合いたかったからではなく、そんな遥香とつき合っている清水がかわいそうで、早く別れさせてやれねばと思ったからだった。

その時、田村の声が聞こえた。

「なあ、何話してるんだ？」

振り返る遥香は、笑顔で言った。

「あ、遠藤さんも行くって。いいよね？」

「ああ、構わないよ」

そうして三人は今日の午後七時、隣町の駅で待ち合わせをすることを決め、解散した。

千鶴はこの地方では名の通った家柄の娘であり、広大な敷地に両親の他、女中や運転手など十数人の使用人と暮らしていた。

六時半ごろ、外出の支度を終えた千鶴は、使用人の運転する黒塗りの乗用車に乗って屋敷を後にした。

千鶴の家から駅までおよそ半時間。教会のある丘は駅と反対方向にあるため、千鶴にとっては遠回りになるのだが、遥香と田村を迎えに行く必要があるためやむを得なかった。

千鶴が駅前に着いたのは、七時ちょうどだった。人口の少ない町とあって、行き交う人は少ない。待っていた遥香と田村に手を振って合図し、車に乗せる。遥香が千鶴の隣に、田村が助手席に座った。

車はUターンし、千鶴の家のある方向に向かった。

そして千鶴の家の近くで道を曲がり、丘のある方角へと向かう。夜遅いせいか、すれ違う人はほとんどいなかった。

「ネコ動で生放送するの」

遥香は笑顔で、千鶴にスマートフォンのyPhoneを見せた。

「はいはい。たぶんいないと思うけどね」

呆れた千鶴はそれ以降、目を閉じて眠っていた。千鶴が目を覚めたのは、車が丘の舗装されていない坂道にさしかかり、揺れ始めたときだった。

千鶴が目を開けると、車は教会へと向かう坂道の途中にあった。前の方に身を乗り出してみ



ると、前方には三年前、千鶴が見た古い教会がそびえていた。

三人の乗った車が、教会の前に止まった。千鶴は運転手に待機するよう言うと、遥香、田村とともに車から降りた。

空には星が輝いていた。夏だというのに、辺りは肌寒かった。吹きつける風が古い教会にあたっては、ひゅーひゅーと音を立てていた。

千鶴は外套の襟を立てた。

「ああ、早く帰りたい」

寒いのが苦手な千鶴は、意気揚々と教会に向かいく遥香と田村にはついて行かず、車の側で待っていた。

どうせ魔法使いなんていない。二人はすぐに帰ってくるだろう。

そう思った千鶴は教会とは反対側の、切り立った崖になっているところに近寄ってみた。町全体を一望できるその場所からは、闇に浮かび上がる明かりが見えた。三年前に来たときは昼だったから分からなかったが、今思えば夜景がきれいな場所だと思った。

千鶴の住む町はいわゆる過疎地であり、教育機関や企業はほとんど存在しない。町の子供は学校を卒業すると、皆どこかに行ってしまう。今は隣町の中学校に通っている千鶴も、卒業後は都会に移り住む予定だった。

ここも見納めだし、来ておいてよかったかな。

眼下に広がる夜景を写真に収めようと、千鶴は携帯電話を取り出した。夜風に吹きつけられながらも、夜景を携帯電話の画面に収め、シャッターボタンを押そうとした。

そのとき、

「千鶴ーっ、魔法使いいたよっ！」

遥香の声が聞こえてきた。

カシャリと鳴るシャッター音。遥香のあまりに予想外で突拍子もない言葉に、画面上の夜景は手ぶれで見るに堪えなくなっていた。

あらためて携帯を構える間もない。子供のように無邪気な声で名前を呼ぶ遥香に、千鶴は振り返った。見ると、教会の扉から顔を出した千鶴が、こちらに手招きしていた。

「千鶴、早く早く」

以前来たときは扉は開かなかったはずなのに、おかしいな。それに、魔法使いがいたとはどういうことだろう。

千鶴は携帯電話をしまい、教会の方に歩いていった。そして、扉のところで待っていた千鶴に手を引かれ、教会に足を踏み入れた。

日中も陽の当たらないそこは、外にましてひんやりとした空気が漂っていた。窓から差し入るわずかな月明かりを頼りに、目をこらす千鶴。三年前、窓の外から眺めた礼拝堂は、依然として古いまま。およそ生気の感じられないそこからは、何者かの住んでいる気配は感じられない。

遥香に手を引かれ、千鶴は敷き詰められた長椅子の間を前方へと進んでいく。椅子の背もたれ

の一つに触れてみたところ、指先にほこりがついた。

「ほんとにいるの？ 魔法使いなんて」

指先に付いたほこりを払いながら、千鶴が言った。

「うん、今田村君が話してるよ」

そんなことあるはずない。誘っておいてやっぱり魔法使いがいなかったでは面目が立たないから、田村が独り演技をしているだけだと千鶴は思った。

魔法使いを発見できたことが嬉しいのか、鼻歌を歌いながら進んでいく遥香に手を引かれ、千鶴は礼拝堂の端に到着した。遥香は突き当たりにあった小さなドアを指差して言った。

「この中にいるの」

「へえ」

子供の背丈ほどのドアの中は、おそらく倉庫だろう。ドアには錆びた取っ手が着いていた。千鶴がよく見てみると、その部分にはほこりがついていなかった。遥香たちが触ったせいだろうか、と千鶴は思った。

遥香が取っ手に手をかけ、ドアを開ける。すると、中から光りがあふれ出た。

「えっ？」

誰もいないはずの教会に、なぜ光りがあるのか。田村は懐中電灯を持っていなかったし、そもそも懐中電灯の光りにしては明るすぎると千鶴は思った。

身を屈め、中に入って行く遥香。千鶴もその後に続いた。

中は十畳ほどの部屋だった。中央にはテーブルがあり、シチューのような食べ物が湯気を立てていた。テーブルには田村が着席し、そのシチューと思われるものを口に運んでいた。

そして何よりも千鶴を驚かせたのは、田村の前の席と、部屋の片隅に二人の少女がいたことだった。

「うそっ」

思わず声を上げる千鶴。こんなところに人がいたことだけでも驚きだというのに、その少女たちの美しさは千鶴をさらに驚愕させた。

年齢は千鶴たちと同じか、少し上くらい。白菊のような純白の肌に、純金でできているかのような金色の長髪を持つ少女たちは、端正な目鼻立ちに、小枝のような細長い指を有していた。

立っていた少女の瞳が千鶴をとらえる。千鶴は金縛りにあったかのように、身動き一つできない。魔法使いと思われる人物に出会ってしまった恐怖からではなく、その少女があまりに美しかったから。

少女に見とれている千鶴に、少女が近づいてきた。

「ようこそ」

スカートの手をつまみ、恭しくお辞儀をする少女。

「お食事の準備ができています」

テーブルの方を差す。テーブルには田村が食べているシチューの皿の他、さっきはなかった皿が二つ載っていた。

「あ、あの……」 やつとの思いで口を開く千鶴。「あなたは、魔法使いですか？」

少女はにこやかにほほ笑むと、

「ええ、そうです」

魔法使いなどいるはずないと思っていた千鶴。だがそんな千鶴でさえ、この二人の並々ならぬ美しさを目にしては、魔法使いの存在を認めざるを得なかった。

テーブルの近くにいた遥香が、手招きした。

「ずっとここに住んでるんだって。お食事用意してくれたみたいだから、一緒に食べようよ！」

遥香と田村が魔法使いの少女二人と会食を始めてから、半時間が立とうとしていた。

四人はおいしそうにテーブルの上の食べ物を頬張っていた。食べ物はなくなると自動で出てくるらしく、食べても食べてもなくなるらない。

出てくるものは最初にあったシチューの他、スパゲッティーやローストビーフといった洋風のものもあれば、寿司など和風のものもあった。デザートにはプリンやスイカ、ケーキなどもあった。

空になったカップには自動で飲み物が注がれるらしく、中身を飲み干す度にワインやコーラなど、その都度違った飲み物が注がれていた。

千鶴はというと、そんな会食を続ける四人とは離れたところにたち、腕を組んで様子を見ていた。

もっとも魔法使いとて、千鶴に食事を勧めなかったわけではない。

魔法使いの言うところによると、彼女たち魔法使いは古くからこの教会で平穩に暮らしており、人間に危害を加えるつもりは毛頭ないという。人里離れた古い教会に住む彼女たちにとって、時折訪れてくる人間をもてなすのがささやかな楽しみのなのだという。

だが子供のころ、魔法使いを見た者は命を奪われてしまうという噂を聞いていた千鶴は、魔法使いの提供する食事の安全を信じられずにいた。

それゆえ千鶴は、次から次へと生じてくる食べ物をおいしそうに頬張る遥香たちを見つめながら、ずっと仁王立でいた。

「ほら千鶴、大丈夫だから食べなよ。おいしいよ」

見かねた遥香がフライドチキンを片手に言った。

「いいえ、結構。何にもないところから食べ物が生じてくるなんておかしいわ」

「えー、でもなんてことないよ。ねえ、田村君？」

鳥の丸焼きとの格闘に夢中になっていた田村は、何も言わずに頷いた。

「ほら、田村君も大丈夫だってよ。せっかくなんだからごちそうになろうよ。千鶴の好きなイチゴとリンゴと蜂蜜入りのクレープもあるみたいだよ。ほら」

クレープの載った皿を差し出す遥香。千鶴がしてみると、確かにそれは学校近くのクレープ店で売っている、千鶴の大好きなクレープだった。

だがそれは千鶴の通う学校の生徒にはあまり人気がないらしく、九百円という価格の高さも手伝ってか、そのクレープを食べている人を千鶴は見たことがなかった。



それほど人気のないクレープが、なぜここにあるのか千鶴は疑問に思った。

「なんであるのよ？」

「知らないけど、自然に出てくるよ」

千鶴が皿を受け取らなかったの、遥香は皿をテーブルに戻した。

「もったいないなあ」田村が横から手を伸ばし、クレープを口に「うん、結構うまいじゃん」

「どう考えてもおかしいでしょうが」

眉をひそめる千鶴。

「でも安全上の問題はないみたいだよ。私たち普通に食べてるけど」

と遥香。

すると、食事を楽しんでいた魔法使いの一人が口を開いた。

「ええ、私たちが魔法を使い、丹誠込めてつくった料理です。安全に問題はありません」

もう一人の魔法使いが言った。

「人里離れたこの場所に住む私たちにとって、客人をお迎えすることは何よりの楽しみ。安全には十分気を遣っています」

千鶴が言った。

「だけど、ここに住んでいる魔法使いは、姿を見た人を殺してしまうという噂がありますが……」

魔法使いの一人が、くすりと笑った。

「どうぞ安心してください。それは人間の流した根拠のない噂にすぎません。私たちにとっては迷惑この上ありませんが」

ワイングラスを傾ける魔法使い。

それでも魔法使いを信じられずにいた千鶴は、しかたなく話題を変えることにした。

「なぜこのようなところに住んでいるのですか？」

千鶴が思うに、その美しすぎる容姿を除いては、魔法使いの見た目は普通の人間と変わらない。ならばなぜ都心部に住まず、こんな寂れた教会に住むのか千鶴は不思議に思った。

もう一人の魔法使いが言った。

「ごらんの通り、魔法使いの魔法は、人間の科学とは本質的に相容れないものです。歴史を通じ、他の種族や民族に敵対的であった人間が私たちの存在を知れば、きっと私たちを滅ぼそうとするでしょう。私たちは人間と戦って滅びるほど弱くはありませんが、無益な争いは避けたい。ですから、こうして人気のないところに住居を構え、時折訪れてくる純粋な子供をもてなす場合を除き、人間とは接触しないようにしているのです」

なるほどと半分納得しつつも、遥香が純粋な子供に該当するかは疑問だと千鶴は思った。遥香は確か、魔法使いの画像を撮影し、ネットにアップロードしようとしていたのではなかったか。

心配になった千鶴が言った。

「ではもしも私たちが、あなたたちのことを誰かに言おうとしたらどうしますか？」

魔法使いは、手にしていたナイフを動かすのをやめた。魔法使いと千鶴の間に一陣の沈黙が舞

った後、

「そうですね。そのときは残念ですが……」

魔法使いはそこで言葉を切った。

千鶴は、彼女たちに私たちを害する意思はないが、もし私たちが彼女たちの存在を公にするなら、殺害される可能性があると思った。

千鶴は遥香のすぐ後ろに近づき、

「ねえ遥香、例の計画はやめた方がいいわ」

耳打ちした。

「ん、何のこと？」

振り向くことなく、チョコレートケーキを頬張っている遥香。どうやら食事に夢中で、魔法使いと千鶴のやりとりを聞いていなかったようだ。

「ほら、ネコ動のことよ」

中継なんてしてないでしょうねと言うため、遥香の耳にさらに口を近づけようとした千鶴。遥香の肩に手を乗せたところ、あまりの熱さに驚いて手を放した。

「え？ ちょっと、遥香——」

身を乗り出し、遥香の顔を見つめる千鶴。

「ん？ どうしたの？」

そう言う遥香の顔はどうも熱っぽい。

「遥香、調子悪くない？」

「……うん、そう言えば」

言われて気づいたのか、遥香は食べかけのケーキを皿に置いた。

千鶴が遥香の額に手を当てると、火のように熱かった。

「ちょっと。田村君、大変」

同じくケーキを頬張っていた田村が、遥香と千鶴を見る。

「遥香、熱あるみたい」

そう話しかける千鶴の腰の辺りに、何か熱いものがぶつかった。驚いて千鶴が振り返ると、辛そうに息をする遥香が倒れていた。

「遥香っ、大丈夫!？」

倒れた遥香の肩に手をかけた。苦しそうに息をする遥香の身体はとても熱く、服の上からでさえ触れるのがやっただ。

「た、助けて千鶴……」

息も絶え絶えながら、遥香が私に手を伸ばす。私の足をつかんだその手は火のように熱い。

「待ってて」

私は立ち上がると、テーブルの向かい側に座る二人の魔法使いを睨みつけた。

すました様子で私の視線を受け止める魔法使い。悶絶壁地する遥香とは対照的な、あまりの冷静さに、私は背筋に悪寒を感じた。

だが、苦しみ悶える遥香を放っておくことはできない。私は意を決し、口を開いた。

「食べ物に、毒が入っていますね？」

しんと静まりかえった部屋に、私の声が響く。

魔法使いの一人は、さも当然であるかのように、

「ええ」

とだけ言った。

私はテーブルに両手をつき、身を乗り出した。魔法使いの驚くほど長い睫を持つ目の中に、怒りで紅潮した私の顔が映る。

「どうしてですか？ 遥香があなたたちのことを誰かに言うと思ったのですか？」

事実、遥香は彼女たちの存在を公にしようとしていた。だが遥香とて言い聞かせれば分からないわけではない。見たところ遥香はまだ放送を開始していなかったようだし、遥香をこんな目に遭わせる必要はない。すぐに毒を解いてもらわなければ。

だが、魔法使いは首を振った。

「いいえ」

「ではどうし——」

言いかけたとき、隣で大きな音がした。見れば、苦しみに顔を歪め、田村が床に倒れ伏していた。

「どうしてこんなことを？」

魔法使いを睨みつけ、言った。

すると、もう一人の魔法使いが口を開いた。

「端的に言って、あなたを除くその二人は、罠にかかったのです」

私は恐怖のあまり、声が出なかった。そんな私を見たもう一人の魔法使いがくすりと笑った。

「二人に効き目が現れる前に、あなたも食べ物を口にしてくれれば手間が省けたのに、残念ですわ」

どうやらこの魔法使いたちは、最初から私たちに毒を盛るつもりだったらしい。

私が言った。

「では、人間を客人として迎えるのが楽しみというのは嘘ですか？」

魔法使いは眉一つ動かすこともなく、

「ええ」

そのあまりの冷淡さに、私は身の毛がよだつ思いがした。どうやら魔法使いとは、人間を騙すことに何のためらいも感じない生き物らしい。

「あなたたちの目的は何ですか？」

怒気を含んだ声が、室内に響く。私が怒っているのは、そうでもなければ、恐怖に押しつぶされてしまいそうだから。

「魔法使いの好きな食べ物が何だか知っていますか？」魔法使いがくすりと笑った。「人間ですよ」

人間？ まさか、私たちを食べるつもりだろうか。

もう一人の魔法使いが言った。

「私たちは人間たちの間に、丘の上には美しい魔法使いがいるとの噂を流し、のこのことやってきた人間を食べているのです」

なるほど。どおりで変な噂が流れているわけだ。

魔法使いの一人が、もう一人に言った。

「姉さん、どうしますか、残った一人は？」

どうやら二人の魔法会は姉妹らしい。姉さんと言われた方の魔法使いは少し考えると、

「あまり好みではありませんが、実力行使しかないでしょう」

「そうですね。では、私が」

ゆっくりと立ち上がる妹の魔法使い。その動作は、獲物を仕留めようとする獣にしてはあまりに遅い。否、それほどの余裕を持ってしても捕らえられるほど、私という獲物の抵抗など意味をなさないということか。

ゆっくりと、一步一步着実な足取りで、魔法使いはテーブルを周り、私に近づいてくる。

もう一人の魔法使いが言った。

「傷つけないよう気をつけてください。大切な食料ですから」

「ええ、分かっています」

どうやら私たちは、最初から食料としか見られていなかったようだ。

だが私とて、みすみす捕らえられるわけにはいかない。魔法使いがやってくる方とは反対側の出口目指して、一直線に駆け出した。

「ごめん、遥香。すぐ助け呼んでくるから！」

教会の外には運転手が待たせてある。車で丘を下り、助けを呼ぼう。車の置いてあるところまで、捕まらずに逃げなければ。

倒れ伏す田村を飛び越え、部屋の出口にたどり着いた私は、ドアを開けようとした。だが、ドアはぴくりとも動かない。

私がこの部屋に入ったときに鍵をかけた覚えはないし、遥香や魔法使いがかけた様子もなかったのに。

背後から聞こえる足音が、次第に大きくなっていく。

一刻も早くここから立ち去らねばならない。少しでも無駄なことをすれば命はないと、早鐘を打つ心臓が伝えてくる。必死の思いで開けようとするも、ドアは最初から壁に貼り付けられた鉄板であったかのように動かない。

私が部屋に入った時点で勝手に鍵が閉まるようになっていたのか。あるいは離れたところから鍵を閉めことができるのか。いずれにせよ、これが魔法使いの魔法使いたる所以なのかと、こんな丘の教会にやってきたことを後悔した。

小さなドアの前で、狂ったようにドアノブを回す私の肩に、何か冷たいものが触れた。見れば、魔法使いの白く細長い指先が、私の肩に添えられていた。その氷のような冷たさに、私は骨身が凍る思いがした。

「諦めなさい。大人しくするなら、苦しませずに食べてあげるわ」

踵を返す私。魔法使いの指が肩から離れる。すぐ目の前にいる魔法使いは、何も言わずに私の返事を待っていた。

考えるまでもない。私の今までの人生は決して楽ではなかったし、生きていてよかったと思ったことも一度もない。だが迫り来る死を前にして、私の答えはおかしなほど単純だった。

魔法使いが口を開く。

「ふふ、恐れることはありません。食べられたあなたは、私たちの血肉として、永遠に生きられるのですから」

その言葉を魔法使いが言い終わるか終わらぬうち、私は魔法使いを蹴ろうと、足を上げていた。

私は今までの人生でこれほどまでに、生きていくということ、ただそれだけがどれほど幸せなことか感じたことはなかった。だからこそ、この命が尽きるまで、必死に生きなければならないと思った。

高く上げられた私の左足が、魔法使いの頭に近づいていく。私のとっさの反撃を予想していなかったのか、魔法使いはノーガードだ。まるで吸い込まれるように、魔法使いの頭に進んでいく私のつま先。

勝った。私は確信した。

魔法使いの力がどの程度のものなのか、私は知らない。だが高速で飛来する物体に画面面を直撃され、無傷でいられる生物などいないはずだ。眼前にいる魔法使いが華奢ならばなおさらだ。少なくとも逃げる時間くらいは確保できるだろう。

あとわずかで私の靴の先端が魔法使いの踵に直撃するという瞬間、ぱしっという乾いた音とともに、私の足は魔法使いの手でつかまれていた。

頭が真っ白になる。魔法使いとはこれほどまでに俊敏に動けるものなのか。

魔法使いは私の足を放そうとしない。魔法使いの指が、私の足首に食い込んでいく。普通の指ならまだしも、小枝のように細い指だ。痛いところではない。

骨が折れるのではないかと思うほどに、締め付けられる足首。私の足をつかみながら、無感動な目で私の様子を観察していた魔法使いは、不意に手を放した。

その場に倒れる私。痛みあまり、立つことができない。片足を押しえながらその場にうずくまる私を見下ろして、魔法使いが言った。

「まだやりますか？」

私は魔法使いの一人によって、牢屋のような場所に運び込まれてしまった。

辺りは真っ暗。足首を怪力でにぎられた痛みで意識がはっきりしない中を背負われてきたため、ここが教会のどの部分に当たるのかは分からない。周囲に窓がなく、座っている床がひんやりとしているところからして、おそらくは地下だろう。

外部と連絡をとろうと携帯電話を取り出そうとしたが、いつの間に抜き取られていたのか、

ポケットの中は空だった。

私を連れてきた魔法使いは何も言わずに帰って行った。魔法使いたちは私たちを食べると言っていたが、少なくとも私は今すぐに食べられそうな状況にはない。

会食をしていた部屋に残された遥香と田村のことが心配だ。二人ともあの弱った様子では逃げられそうにないし、もしかすると既に食べられている可能性もある。遥香には自業自得のきらいがあるとはいえ、食べられるのはかわいそうだ。

いや、遥香は痩せているからも肉くらいしか食べられないはずだ。食べがいが無いと思って見逃してくれていないだろうか？

そもそも魔法使いは人をどう食べるのだろうか？ 生で食べるのだろうか？ ……いや、動物を生で食べるのはよくない。そうすると茹でるのだろうか。いや、火で炙るという可能性もあるな。

—様々な調理補方が頭に浮かんで消えていく。だが、そのいずれも残酷であるという点には変わりなかった。自分もいずれ食べられる身であることを考えると、身震いせずにはいられなかった。

何とか脱出しなくっちゃ。

立ち上がろうとした私は、天井に頭をぶつけてしまった。

「痛っ、もう……」

手探りで調べてみると、天井の高さは私の背丈ほどもなかった。私は床を這い、出口がないか確認することにした。

四つんばいになって進むこと一メートル。突如、私の頭は何か固いものにぶつかった。

お、壁か？

手で触ってみると、ごつごつした岩でできた壁らしきものであることが分かった。方向を変え、壁づたいに進む私。

しばらく進むと、また何かにぶつかった。調べてみると、やはり壁のようなものだった。

もう一度方向を変え、進む私。しばらくしてまた壁にぶつかり、向きを変え、又壁にぶつかったところで、この空間にはおよそ出口らしきものは存在しないことに気がついた。

おかしい。ここに来たときはどこかに入り口らしきものがあったのに。

私は自分の通ってきた道をもう一度進み、何か手がかりがないか調べてみた。

だが、結果は何もなし。辺りは固く冷たい壁で覆われているだけで、外へと続いていると思われる箇所は発見できなかった。

出口のない部屋。これも魔法か何かなのだろうか。だとすれば抵抗するだけ無駄だ。次に魔法使いと対峙したときに備え、今は体力は消耗しない方がいいだろう。

私はその場に寝そべった。床はとても冷たく、体温が失われていくのが分かる。ひよっとすると魔法使いはここで私が餓死や凍死するのを待っているのかもしれない。

こんなところに来るんじゃなかったと、後悔の念が過ぎる。思えば、私が初めて丘の上に来たのは三年前。その時無事に帰れたのは幸運だった。本来ならその時死んでいてもおかしくなかったのだから、余計に三年間生きられたのはましと思うべきか。



ところでなぜ三年前は魔法使いが出てこず、今回は出てきたのだろうか？ 丘の上に魔法使いがいるという噂は当時からあったのだから、やはりそのころも魔法使いはいたはずだ。

当時の私のような子どもは食べがいがいいから、もう少し大きくなるのを待とうと思ったのだろうか？ ……いや、あの魔法使いたちに、過去に私に会ったことがあるという様子は感じられなかった。

目を閉じ、あれこれ考える私の頭に、一つの言葉が浮かんだ。

「魔法使いは夜にならないと現れないんだ。夜の魔法使いっていう種類らしいからな」

冗談と思い聞き流していたが、確かに田村はそう言ったはずだ。

夜にならないと現れない。――それが、三年前に私たちが魔法使いに会えなかった理由か。

だが夜にならないと現れないということは、昼には消えるのだろうか？ いや、消えないにしろ、「夜の魔法使い」という種類である以上、その活動時間は主に夜のはずだ。

私はつけていた腕時計の文字盤を点灯させるスイッチを押した。暗闇の中、蛍の光のように腕時計の文字盤が浮かび上がる。

時刻は午前二時。日の出が六時なら、夜はあと四時間しかない。魔法使いの活動が夜に限定されるならば、魔法使いたちはまず遥香や田村を食べ、夜が明けるまでに食べきれない私をここに閉じこめたとも考えられる。もしそうなら、私が食べられるのは早くて今日の夕刻ということになる。

焦るのはまだ早い。そう思った私に、疲れがどっと押し寄せてきた。思えば魔法使いとの対面といい、格闘といい、今日は人生で初めての出来事が目白押しだった。

まずは休んでから作戦を考えよう。目蓋を閉じた私は、消え入るように眠りについた。

大地には、さんさんと降り注ぐ日光を受けた、まばゆいばかりの牧草が生えていた。見渡す限りの緑に染まった大地を、澄み切った空気が駆け抜けていく。

生い茂る牧草は、昔から手つかずのまま存在していた。人間に踏み荒らされることも、動物に食い荒らされることもなかった。その場所には誰も足を踏み入れることができなかったから。

今、一匹の子羊が、その場所へと続く橋を渡ろうとしていた。下には底が見えないほどの谷があった。丸太で作られた橋は、向こう側に渡ることはできるが、引き返すことはできない。

羊が橋の中程まで来たところ、谷の下から声が聞こえてきた。声は地響きのように大きく、声の主が一言発するたびに谷が震え、側面の土がぱらぱらと落ちていった。

「私の橋を黙って渡るのは誰だ」

小さな羊は身を震わせた。

「勝手に橋を渡るやつは生かしておけん。食べてくれるわ」

大地が揺れ、羊の載った橋が揺れる。羊は身を屈め、橋にしがみついた。

「待ってください。後からもっと大きな羊が来ます。そっちを食べてください」

羊が言った。

谷からの声が言う。

「ふむ。本当か？ 嘘であれば、帰りにここを通るときに食べてくれるぞ」

「本当です」

羊がそう言うと、谷からの声は聞こえなくなった。羊はおそる丸太の上を歩き、牧草の生い茂る反対側にたどり着いた。

間もなく橋の上に現れた次の羊は、同様の手段で難を逃れ、最後に現れた大きな羊は、谷に潜む声の主をやっつけてしまった。

――そんな夢を、見ていた。

私の耳に入ってきたのは、凜とした魔法使いの声。見れば、魔法使いの一人が私を見下ろしていた。

魔法使いが来る前に逃げ出す作戦を考えようと思っていたが、どうやら寝過ぎてしまったらしい。腕時計に目をやると、時計の針は午後六時を指していた。真っ暗な部屋にいたため、時間の感覚を失っていたようだ。

魔法使いが言った。

「よく眠れましたか？」

「ええ、まあ」

私がそう答えると、魔法使いは片手で私の腕をむんずとつかみ、引き上げた。細身の割に、相変わらずの怪力だ。

「来なさい」

魔法使いに腕をつかまれたまま、歩かされる。部屋には昨日確認したときにはなかった、人の背丈ほどの穴が開いていた。

穴を通り、しばらく階段を上がると、昨日遥香と魔法使いたちが食事をしていた部屋にたどり着いた。

部屋には姉と呼ばれていたもう一人の魔法使いが椅子に座っていた。その魔法使いに勧められ、私は向かいの椅子に座った。私が逃げないようにするためか、もう妹の魔法使いが後ろに立った。

「さてどう食べましょうか、姉さん？」

「そうですね――」

私を見つめる向かいの魔法使い。頭の前から胸の辺りまでじっくりと見つめた後、私の後ろに視線を向け、

「希望はありますか？」

妹の魔法使いは片手で私の胸の辺りに触れ、

「見ての通り大変痩せています。塩漬けにするのも面倒なので、そのままでもいいのではないしょうか？」

そのままということは、生きたままがぶりということだろうか？ .....恐ろしい。

姉の魔法使いが言った。

「そうですね。しかし昨日の雌といい、最近の人間は痩せている。近年は食糧事情が悪いのだろうか？」

「そのようですね」

どうやら魔法使いはダイエットという言葉を知らないらしい。

妹の魔法使いが言った。

「食べる部分の分け方はどうしますか？」

「私は心臓ともも肉をもらえれば結構よ」

「むっ。姉さんはいつもいいとこ取りです。たまには私にもも肉を……」

頬をふくらませる妹の魔法使い。

「あなたには残りをすべてあげるわよ」

妹の魔法使いは私の胸の辺りに触れ、

「ですから、胸肉が全然ないと」

どうも失礼な感じだ。

「内臓を食べればいいじゃない。肝臓にはグリコーゲンが貯蔵されているから栄養があっというわ」

「いつもいつもそればかり。もう食べ飽きました。なら心臓をください」

「しょうがないわね……」

「では姉さんからどうぞ。先に心臓を食べて血が飛び散るといけませんから」

「はいはい」

立ち上がる姉の魔法使い。テーブルを周り、ゆっくりと私の方に近づいてくる。

魔法使いが後数歩の距離に迫ったとき、私は何とか時間を稼ごうと口を開いた。

「――あの、遥香はどうなったんですか？」

「はるか？」

姉の魔法使いが言った。

「あ、えっと、雌の方です」

「食べたわよ」

あっさりとした口調の魔法使い。

「ど、どうやってですか？」

「あなたと同じよ」

私の腕をつかむ魔法使い。魔法使いの細長い爪が、肌に食い込んでいく。

「……で、では雄の方は？」

「あっちは少し大きいし、塩漬けにしてるわ」

魔法使いは私の腕を引き、私を床に座らせた。

「と、ということは、まだ生きていますか？」

私の上半身を倒し、床に寝かせる魔法使い。

「もう死んだでしょう。塩漬けですから」

魔法使いは私の足を開かせると、

「じっとしてなさい」

太ももに口を近づけた。大きく開かれた魔法使いの口に、犬のように鋭い牙が光るのが見えた

。

「……ちょ、ちょっと待ってください」今までの人生で、これまでにないほどの恐ろしさを感じた私が言った。「い、痛いですか？」

「さあ」あっさりと言う魔法使い。「私は人間でないし、食べられたこともありませんが、動物である以上、大動脈を切断されて痛くないということはないでしょう」

私は魔法使いの頭に手をやり、脚から遠ざけた。

「た、食べないでください。お願いします」

震える手を合わせて懇願する。そして、こうなればもう陳腐な言い訳でも言わないよりはましだと、夢で耳にしたような台詞を口にしていた。

「私を逃がしてくれたら、私より大きい人間を連れてきます！」

私を食べなければ、代わりに私よりも大きな人間を連れて来るという私の提案に、魔法使いたちは戸惑っていた。

当初、姉の魔法使いは、私が約束を守る保障がないと一蹴した。だが妹の魔法使いは、人間の食糧事情が悪くなり、肥えた人間が食べにくくなった今、この少女の提案に乗ってみるのも悪くないと述べた。

魔法使いたちの議論は十分ほど前から続いている。私は床に寝かされたまま、姉の魔法使いが足下に座り、妹の魔法使いが頭の近くに立っている。

妹の魔法使いは私の提案にかなり前向きなようで、うまくいけば太った人間が毎日食べられるようになると姉を説得。一方、姉の魔法使いはもし提案に乗るのであれば、私が確実に約束を履行するような手段を設けなければならないと言っている。

「――そうですね、何かいい方法はないでしょうか？」

今にも折れそうなほど長い人差し指を口元に当て、妹の魔法使いが言った。

「難しいわね。調子いいこと言って逃げるつもりかもしれないわ」

疑い深い目つきで私を睨みつける姉の魔法使い。

魔法使いが疑うのももっともだ。私は自分が助かるために、他人を犠牲にするつもりなど毛頭ない。逃がせば最後。私は二度とこの丘には訪れず、人里離れた地域に引っ越し、安穩と暮らすつもりだ。

「やはり無理ね。ふつうに食べましょう」

突如、私に飛びかかり、馬乗りになる姉の魔法使い。細身とはいえ、身体の上に飛び乗られるとかなり痛い。

しまった。見抜かれたか。

「まずは黙らせないといけないわね」

私の首に口を近づけてくる魔法使い。大きく開けられた口から、狼のような犬歯が現れる。

もうだめだ私は思った。だが、その牙の先端が私の首に触れた瞬間、妹の魔法使いがポンと手を打った。

「あっ、姉さん。待ってください」

姉は口を離した。いぶかしそうな顔で妹を見つめる姉。

その視線に答えるように、妹が言った。

「いい方法を思いつきました。この少女に死の呪いをかけるのです。ただし発症までに一定の期間を設けておいて、期間内にこの少女が他の人間を連れてくれば、期限を延ばすのです。そうすることにより、約束を破らせることなく、何人でも連れてこさせることができます」

それでは私が一生飼育殺しになってしまうのではないか。そもそも私は他人を犠牲にしてまで生き延びたいとは思わないのに。

だが、

「なるほど、それはいい考えです。呪いは我々夜の魔法使いの十八番ですから」

姉の魔法使いはあっさり賛成してしまった。

妹が言った。

「では、私が呪いをかけましょう。ですが期限はどうしましょうか？」

こうなったら仕方がない。いずれ死ぬのは不本意だが、今死ぬよりはましだ。できるだけ長い期限を設定してもらい、せめてその期間は余生を楽しむとしよう。

姉が言った。

「明日の夜でいいでしょう」

さすがにそれは短すぎる。

私が口を開いた。

「……あ、あの、一週間くらいにしてもらえませんか？」

同時に私を睨みつける二人の魔法使い。

「一週間？　ほんとにやる気あるの？」

「そうよ。そんなに要らないでしょうが」

私は一瞬、返答に窮したが、

「私の通う学校、あ、人間の集まる場所なんですけど、そこは今日からしばらく休みなんです。休みにはあまり多くの人とは会えないので、連れてくる人を見つけるには少し時間がかかるんです」

我ながらもっともらしい理由だ。

姉の魔法使いは妹を見て、

「お腹も空いたし、やっぱりすぐ食べましょう」

しまった。逆効果だったか。

だが、妹の魔法使いは首を振った。

「ですが、しばらくは昨日の雄の人間が残っていますが……」

そうだ、塩漬けにされたという田村がいるじゃないか。田村のせいでこうなったのだから、し

ばらくはそれを食べて我慢してもらうしかないだろう。

「……ええ、あっちの方が私よりおいしいと思います」

「ふんっ、適当なことを言って。食べたことないくせに」

姉が言った。

それはそうだ。

「やっぱり信用できないのではないか？」

と姉。

妹が言った。

「まあまあ姉さん、一週間くらい与えてもよいのではないのでしょうか？ その間に他の人間を連れて来られなければ絶命するだけですから、約束を破るということはまずないと思います」

姉の魔法使いは私の顔をしばらく見つめた後、

「分かったわ」

私の上から下りた。

妹の魔法使いは、その細長い指先で私の片手をつかむと、彼女のもう片方の手を私の手の甲に乗せた。

「これから呪いをかけます。いいですね？」

私を見据える魔法使い。

ここで首を振れば、私はこの場で食べられることになるだろう。呪いという得体の知れないものをかけられることは遺憾だが、この場で死ぬよりはましだ。

私は頷いた。

瞬間、魔法使いに触れられている手に、電流のような衝撃が走った。その衝撃は瞬く間に前身を駆けめぐり、苦しくなった私は悲鳴を上げた。

それきり、衝撃は消えた。まるで感電したときのように、身体に入った電流が、地を伝わり、どこかへ出て行ってしまったかのように。

手を放す魔法使い。

放された手をおそろおそろ見てみると、甲の中心部に赤いあざのようなものがついていて、これは呪われた印だろうか？

まじまじと自分の手を見つめる私に、魔法使いが言った。

「期限は来週の二十四時。期限が到来すると絶命します。それまでに他の人間を連れて来れば、期限を延長します」

それだけ言うと魔法使いは踵を返した。

もう帰っていいということか。そう思った私が帰ろうとすると、思い出したように魔法使いが振り返った。

「ああそうそう。呪いを解こうなどとは考えないことです。我々夜の魔法使いの呪いは魔法における最高芸術。解こうとすれば、その時点で絶命します」



そう言い残して、妹の魔法使いと姉は奥の部屋に消えてしまった。

もともと、私は呪いの解き方なんて知らないけどね。

独り残された私は部屋を出た。埃をかぶった長椅子の間を歩き、教会の出口へと向かう。

さて、教会の外に私の車はあるだろうか？ 私が教会に入ったのが昨日の夜。あれから丸一日近く経っているのだから、もう屋敷に引き返しているかもしれない。両親が心配しているかもしれないし、早く帰らないと。

出口にたどり着いた私が扉を開けると、正面には私の車が待機していた。

あれ？ まだ待っててくれたのか。ご苦労なことだ。屋敷に戻ったら割り増しの給料をやらな  
いと。

私が車に近寄ると、運転手の中からドアを開けた。乗り込んだ私が言った。

「待たせたわね。大変だったでしょう。お疲れ様。帰るわよ」

私の言葉に戸惑う運転手の表情が、バックミラー越しに見えた。

「いえ、待つも何も、すぐお戻りになったではないですか。もうよろしいのですか？」

と運転手。

え？ 目が点になる私。

「ちょ、ちょっと待って。私、すぐ出てきたの？」

「ええ、友人の方に手招きされて教会に入ったかと思ったら、もう出てきましたが……。お二方はよろしいのですか？」

そうだったのか。どうやら教会に入っている間は時間の進み方が違うようだ。これも魔法か何かの影響だろうか？

ともかく運転手に余計な心配をかけても仕方がないし、これ以上言及するのはやめておこう。

「……そ、そうよね。二人は自分で帰るから、もういいって。さ、屋敷に戻って」

「かしこまりました」

エンジンがかかる車。広がる夜景をその車窓にとらえながら、丘を滑り降りていく。

バックミラー越しに小さくなっていく教会を眺めると、私の心は少し落ち着いてきた。

だが同時に、後悔の念が過ぎる。魔法使いは見たものを殺してしまう。――そんな噂を知っていながら、私は教会に行くという遥香を止めることができなかった。

頬を伝う涙。自分の余命さえあと一週間という身ながら、遥香という入学以来の友人を失った悲しみは小さくなかった。

翌日の昼、私は学校に向かっていた。

学校は今日から夏休み。私が休みの学校に行かなければならない理由はない。

だが独りで家にいると一週間後に死ぬという恐怖に押しつぶされそうで、せめて残された余生を部活動などで登校してきた級友たちと過ごせればと思ったのだった。

学校に着いた私はとりあえず食堂に向かった。今の時刻は十二時ちょっと過ぎ。部活動で生じた空腹を満たそうと、食堂に行く生徒も少なくないと考えられるからだ。

案の定、食堂はジャージや道着を着た生徒でごった返していた。私は券売機に並び、今日のお薦めメニューになっていた「ねこねこそば」の食券を買った。

二百円という価格はちょっと安すぎるので不安だったが、カウンターに並んで実際に受け取ってみると、なんのことはない、ただのきつねそばだった。

なんだよ、ねこねこって……

見知った顔を捜しながら、食堂を歩く私。食堂の中程まで着たところで、知っている人を発見した。

その名は桜。一年生のころ私と同じクラスだった彼女は自称靈感が強いらしく、入学当初はしばしば彼女の発言に驚かされたものだった。

「あっ、古川さん、背中に霊が憑いてるよ」

それが、私が聞いた彼女の最初の言葉だった。

「えっ、うそ？」

振り返る吉川という女子生徒に、桜が続けた。

「私、靈感が強くて、霊とかいるとすぐに分かるのよね。古川さんにも憑いてるわ」

「え～、怖いわ。憑いてるとどうなるの？」

震え上がる女子生徒に、桜が言った。

「そうね。迷ったときに道を教えてくれることがあるわね」

「えっ、それって便利じゃん？」

「そうよ」

「何か不利益はないの？ 体力が奪われるとか？」

「特にないわ。無償のカーナビがついたと思えばいいわね」

「なんだ。よかった」

胸を撫で下ろす女子生徒。

そのやりとりを、私は少し離れたところから啞然として見ていた。霊が憑いてる？ そんなことあるわけないだろう。

彼女が私に話しかけてきたのは、その次の日だった。

「ねえねえ千鶴さん」

私の制服の裾を引っばる桜。

「はい？」

振り返る私を、桜の青色の瞳がとらえる。桜は混血なのか、青色の目と金色の髪を持っていた

。

桜のか細い指が、窓の外を指差す。

「校庭の向こう側、鉄棒に袋が着いているでしょ？」

目を凝らしてみると、校庭の端にある鉄棒に巾着袋のようなものがくくりつけられていた。そして、それは振り子のようにゆっくりと前後に揺れていた。

「それがどうしたの？」

「あれは風がないときもいつも揺れているのよね。以前この学校で死んだ人の霊が揺らしてるの」

またこれか。しょうもない冗談を平然と言う人だ。

「何で霊が揺らすのよ？」

「揺らしたいから」

さも当然のように言う桜。

「じゃあ、私に霊は憑いてる？」

自分を指差す私。

桜は首を振った。

「ううん。あなたの体はいたって正常ね」

「あら、そう」

そんなやりとりをしたのが今から一年前。それから時折、桜は霊や妖怪、お化けに関する話をしてきた。今はクラスが違うので、会ったのは久しぶりだ。

私が彼女を見ていると、彼女も私に気づいたのか、彼女の青色の瞳と目が合う。

私は彼女の向かいの席に座った。

「こんにちは。お久しぶりね」

笑顔で話しかける私に、彼女は無感情な声で、

「お久しぶり。まさか呪われた状態のあなたとお会いするとは思わなかったわ」

その言葉に、私は背筋が凍る思いをした。ちょっと待った。桜は今、何と言ったか。

呆然とする私に、桜が口を開いた。

「どうしたのですか？ まさかそれだけの呪いを受けて、気づいていないということはないでしょう？」

私は自分が呪いをかけられたことを、家族はおろか、誰にも話していない。まさか、彼女の靈感とやらは本物だったということか。

「ちょっと桜、わかるの？」

その問いに、無言で頷く桜。

着席した私は呪いをかけられた手を桜に見せた。

「まずい？」

「ええ」

私は身を乗り出して、桜の耳に口を近づけた。まさかこんなところにあの魔法使いはいないだろうが、念のため。

「どうすれば解けるの？」

ささやく私。

桜は私の手を取り、まじまじと見つめた。

「かなり高度な技術でできてるわね。芸術品と言ってもいいくらい。かけたのはかなりの魔術師か、あるいは魔法使いね」

「夜の魔法使いって言ってたわ」

それを聞いた桜の表情が曇る。

「あらあら、ずいぶんとまずいものと対面したわね。何があったの？」

私は昨日起こった一部始終を話した。頷きながら聞いていた桜は、私の話が終わると、  
「夜の魔法使いは、五千年以上続くある名家の魔法使いたちのことよ。卓越した魔法の能力を持ち、特に呪いの技術は世界一とも言われる、いわば魔法使い中の魔法使いね。ただの魔法使でも珍しいっていうのに、案外身近なところにいたものね。驚いたわ」

「どうすればいいの？」

「そうね。私の技術ではこの呪いは解けそうにないわ。下手にいじって発動させても大変だし、呪いに関しては放っておくしかないわね。一般に呪いを含めた魔法の効果は、それをかけた魔法使いが死ぬと失われるんだけど、相手が夜の魔法使いじゃ戦っても勝ち目がないわね」

「じゃあ、もう助からないってこと？」

「残念だけど、余生を楽しむことを考えるべきね」

あらら。せっかく希望の光が差したかと思ったのに。

私はしかたなく、今まで手をつけていなかった「ねこねこそば」とやらを口にした。だが、麺がすっかり伸びてしまっていてあまりおいしくない。

沈黙を破るため、私が言った。

「ところでこれ、『ねこねこそば』って言うんだって」

「ええ、猫好みの味付けらしいわね」

「そうなの？」

「この前掲示板に出た『食堂からのお知らせ』という紙に書いてあったわ」

「何で猫なの？」

「猫は健康志向で、カロリーや塩分の低いものを好むからって書いてあったわ。要するに、ダイエット用ね」

そうだったのか。どおりであっさりしているわけだ。

それから数刻の沈黙の後、桜が言った。

「ん、待てよ。確か夜の魔法使いの弱点って、猫だったような……」

「――ええと、夜の魔法使いは黒猫を不吉なものと考えており、大の黒猫嫌いである。黒猫を見ると気が動転し、即座に退散するとされる、か」

ここは部長を務める華道部の部室。誰もいないから話すのに便利だと、桜に連れてこられたのだ。活動は午前中で終了したらしく、今は私と桜の二人しかいない。

桜は横文字の表紙のついた、「魔術辞典」とかいう本を読んでいる。私は何もすることがないので、桜の向かいのテーブルに座り、出されたお茶をすすっていた。

「やっぱり、夜の魔法使いは黒猫に弱いみたいね。黒猫を利用して呪いを解かせる方法はないかしら？」

私を見つめる桜。

いや、助言を求められても困るけど……

「そうは言っても、黒猫を見るとすぐ逃げちゃうんでしょ？ だったら呪いを解かせる間もないと思うけど」

「そうなのよね」

湯飲みを傾けた桜は、それきり何も言わなくなった。

沈黙の中、部活動のものと思われるかけ声や球を打つ音だけが聞こえている。

せっかく私の呪いを理解してくれる人に出会えたかと思ったのに、活路を見いだせないとは残念だ。

私の湯飲みが空になったのに気づいた桜が、急須のお茶を注いだ。

「どうも」

「いいえ」

ところで桜は一体何物なのだろう？ 自称靈感が強い少女だそうだが、魔法にも明るいようだ。

「――ねえ、ところで桜って何者なの？」

単刀直入に尋ねる私。

桜は不思議そうに、

「中学生だけど」

それは知ってるって。私もそうだし。

「いや、そうじゃなくて何か特殊な身分のかなって……」

少なくとも一般的な中学生は呪いにも気づかないし、「魔術辞典」なる書物も所有していないはずだ。

桜が言った。

「そうね、又の職業は魔法使いかしら」

魔法使いなのか。どおりで。――というか、

「桜も魔法使いだったの!？」

思わず立ち上がる私。後ろの方で椅子の倒れる音がする。

そんな私を見上げた桜は、さも当然のように、

「ええ」

昨日魔法使いに会っただけでも驚きだったというのに、まさかこんな身近なところにも存在しているとは。

桜は茶を一口飲むと、

「まあ座りなさいって」

「はい」

倒れていた椅子を元に戻し、着席する私。

桜が言った。

「魔法使いといっても大したことないのよ。魔術師程度の能力しかないし、世界に名だたる夜の魔法使いとは比べものにならないわ」

ん？ 魔法使いと魔術師は違うのだろうか？

私の疑問を察したのか、桜が続ける。

「魔術師っていうのは魔術を使う人のこと。魔術は魔法に劣るから、言うなれば魔法の廉価版ね。もっとも魔術は不可能を可能にする非科学的な力という点では魔法と共通だけど、その効力や発生の原因などにおいて本質的に魔法と異なるわ。一方、魔法使いっていうのは魔法を使う生き物のこと」

「生き物？」

「ええ、魔術師が人間であるのに対し、魔法使いは人間でないとされているの。だから、生き物」

「――ということは、桜は人間じゃないの？」

「ええ、そういうことになるわね」

これは驚いた。まあ、人間を食料としているかの夜の魔法使いが人間であつたら困るけど……

まじまじと桜を見つめる私に、桜が言った。

「どうしたの？」

「いや、桜が人間じゃなくて魔法使いだったなんて意外だなんて……」

「魔法使いといっても、私は純血じゃなくて人間との混血だから実質的にほとんど人間と変わらないわ。人間を食べる趣味もないから安心して」

「あ、そうなの」

胸をなで下ろす私。

ところで魔法使いと人間は子供が作れるのか。確かに魔法使いの見た目は人間そっくりだけど。

私が言った。

「ねえ、魔法使いって人間と性交できるの？」

「ええ、そうらしいわ。夜の魔法使いは人間を嫌っているそうだけど、魔法使いの中には自らが魔法使いであることを隠し、人間との共生を図るものもいるわ。私の母親もその一人で、私が母親からそのことを打ち明けられたのは七歳のころ。その時初めて自分が魔法使いとの混血だって知ったし、魔法の使い方も教えてもらったわ。もっとも父親には言わないようになってきつく言



われているから、父親には教えないし、魔法を見せることもしないけどね」

へえ、そうだったのか。

「じゃあ桜が人間と子供を作ると、その子も魔法使いになれるの？」

桜は湯飲みを傾けてから、

「さあ。魔法使いと人間との混血は、純血の魔法使いに比べ力が劣るから、私が普通の人間と子供を作れば、その子はもう魔法使いと言うに値しないかもしれないわね」

「その場合は魔術師になるの？」

「ううん。魔法使いと魔術師は全くの別物よ。魔法使いの子どもでなければ魔法使いになれないのに対し、自らの努力で魔術を修得する魔術師は必ずしもそうでないそうね。もっとも魔術師の家柄に生まれないと魔術の修行が受けられないし、魔術の才能も多少は遺伝するらしいから、実際には魔術師も世襲みたいなものらしいけど」

「ということは、桜が自分の子どもを魔法使いにするには、魔法使いの男と結婚すればいいわけね。……あれ？ 魔女って言うのはいるけど、魔法使いの男っているの？」

「いるらしいけど、私の知り合いにはいないわね。もっとも魔法の遺伝子は伴性遺伝だから、魔法使いは女に生まれたときにのみ魔法が使えるの。魔法使いの男は魔法が使えないから、端から見ると普通の人間と区別がつかない。このため人間の数が爆発的に増加した現代においては女の魔法使いが相手を見つけづらく、魔法使いの数が急速に減少する原因になっているそうよ」

そうだったのか。日本の将来は少子化で大変だそうだが、魔法使いの世界も大変そうだ。

「ところで、純血の魔法使いってみんな人間食べてるの？」

もしそうなら人間にとって大きな脅威だ。人類は一丸となって戦わなければならないだろう。もっとも冷戦が終わり、核兵器をもてあましているアメリカとロシアにはちょうどいいかもしれないけど。

桜は湯飲みを傾けてから、

「ううん。夜の魔法使いのような上級の魔法使いは、その身体を維持するために人間しか食べないそうだけど、それ以外の魔法使いは必ずしもそうではないわ。実際、私の知っている魔法使いにラベンダーしか食べないのがいるわね」

ラベンダーって食べられたのか。私は花屋の娘だけど知らなかったぞ。

「そういえば千鶴って花屋の娘じゃなかった？」

と桜。

「ええ、そうよ」

私はこの地域ではわりと名の通った花屋の娘だ。花屋というと個人経営の小さなお店を思い浮かべるかもしれないが、私のところは違う。地代の安い過疎地に広大な敷地を有し、最新鋭の農業機械を利用して、他品種かつ大量の花を育てる大規模花畑経営業だ。ガーデニング用から冠婚葬祭で用いる花まで、広く全国からの需要を賄っている。

桜が言った。

「ラベンダー扱ってる？」

「ええ、扱ってるけど……」

それがどうしたのだろう？

「いっぱいある？」

「ええ、メジャーな花は大量に作ってるから、たぶんいっぱいあると思うわ。今が旬だし」

それを聞いた桜は目を輝かせた。

「ちょうどいいわ。私の知っているラベンダー好きの魔法使いに、大量のラベンダーと引き替えに夜の魔法使いをやっつけるのに協力してもらっていいのはどう？」

「えっ、そんなことできるの？」

声を弾ませる私。

「ええ、どちらかという自分の利益で動くタイプだから、聞いてみる価値はあるわ。純血の魔法使いだから、能力的にも私よりましだし」

「やったあ」

九死に一生を得られる可能性に、思わず飛び上がる私。私の命ためならきつと両親も喜んでラベンダーを提供してくれるだろう。

私が学校に再び足を運んだのは、それから三日後のことだった。

二日前に桜から電話があり、例のラベンダー好きの魔法使いと連絡がとれ、話をするために私たちの学校まで来てもらうことになったという。

夕方、私が桜に指定された時刻に部室に行くと、中には桜と白銀の髪を持つ少女がいた。

少女の背は高く、目は桜と同じ青色。差し入る夕日に映える肢体は驚くほど細く、今にも折れそう。

「ちょっと、早く閉めなさいよ」

桜が言った。

「えっ、ああ」

ドアを閉める私。少女のあまりの容姿の良さにに見とれ、閉めるのを忘れていたようだ。

「ただでさえこまで来るの大変だったんだから」

頬をふくらませる桜。

桜が苦勞するのも無理はない。これだけの美少女に校内を歩かせたら人目を引いて大変だ。どうも魔法使いというのは美しすぎていけない。

私が少女に歩み寄ると、少女はにこやかにほほえみかけ、

「Hallo, ich bin Julia.」

鈴の音のような声で、私には理解できない言葉を口にした。

「はい？」

目を点にしたまま、立ちつくす私。桜や夜の魔法使いと違い、外国語しか話せないのだろうか。だとすれば大変だ。私は今聞いた言語はおろか英語もできないし、意思の疎通は困難だろう。

戸惑う私に桜が言った。

「こらこらユリア、ちゃんと日本語で話さない」

ユリアと呼ばれた少女はクスリと笑うと、

「はじめまして、ユリアです」

なんだ。よかった。

ユリアが手を差し伸べてきたので、私も手を伸ばし、木の枝のような細い手と握手をする。

夜の魔法使いも痩せていたが、このユリアという少女もずいぶんと細身だ。魔法使い同士の戦いには詳しくないが、こんなにか弱くて大丈夫なのだろうか？

桜が言った。

「ユリアはリヒテンシュタイン在住だけど、日本に留学していたこともあって、日本語は話せるから安心して」

「へえ、そうなの」

わざわざ外国からとはご苦労なことだ。無事私呪いが解ければ、お礼として大量のラベンダーを与えねばならない。

桜はユリアに向き直ると、

「ちょっと桜の呪いを見てくれるかしら？ あなたが解けるなら、何も夜の魔法使いと戦うまでもないわ」

「そやね」

とユリア。

そやね？ 聞き慣れない言葉遣いだ。テレビでしか聞いたことないぞ。

「ちょっと失礼」

ユリアは、そのか細い指で私の手を取り、じっと見めると、

「あら、これはだめやねー。何重にも安全装置がかかって、下手に解除しようとするとう発動してしまうわー」

ちょっと待った。発言の内容への失望はともかく、明らかに変わった言葉遣いだ。

手を放すユリアに、私が言った。

「あの、どちらに留学されてたんですか？」

ユリアは不思議そうな顔で、

「京大やけど」

なるほど。どおりで。

だが、そうなるなら桜とユリアはどこで出会ったのだろうか？ 桜は一年生のころからずっとこの学校いたし、関西に行ったという話も聞いたことがない。

私は桜に向き直り、

「ユリアさんとはどこで知り合ったの？」

「魔法協会っていう、魔法使いの集い。魔法使いの世界における国際会議みたいなもので、各地の魔法使いが集まってくるの」

へえ、そんなものがあるのか。

「それって夜の魔法使いも入ってるの？」

「加盟はしているみたいだけど、会ったことはないわね。協会では新しく開発された魔法につい

ての情報や人間との共生に関する意見の交換を行っているけど、夜の魔法使いのように単独で力のある魔法使いには、そんなの必要ないってことかしら」

そう私に話す桜の袖を、ユリアが引っぱった。

「ねえ桜、例のラベンダー畑見せてよ」

「そうね、あらかじめ報酬を確認しておく必要があるわね。千鶴、連れて行ってくれるかしら？」

「うん、いいけど」

私は昨日のうちに花畑を経営する両親に事情を説明し、畑のラベンダーの処分を任されていた。

こうして私は桜とユリアの二人と、うちの花畑へと向かうことになった。

花畑へと向かう車の中、後部座席の端に座っていた私は真ん中の桜に耳打ちした。

「ねえ桜」

「ん、何？」

「夜の魔法使いといい、ユリアさんといい、桜といい、魔法使いってみんな美しいけど、どうしてなの？」

桜は少し考えてから、

「美しいというか、単に千鶴の趣味に合ってるだけじゃないの？ もともと魔法使いはあまり力仕事しないから痩せてるし、昔から人目を忍んで暮らしてきたから、日に当たらず肌が白いだだけだよ」

そういうものかな？ 何かそれ以上の美しさを感じるけど……

腑に落ちないという表情をする私。

ユリアが口を開いた。

「あら桜、知らないの？ 魔法使いの中には、自らをきれいに見せる魔法をかけるのもいるんやよ。人間が化粧をするのと同じやね」

「え、そうなの？」

目を丸くする桜。

桜でも知らないことがあるらしい。

「夜の魔法使いなんてその代表格よ。人間を食べて得た魔力で自らを美しく見せることを生き甲斐にしているらしいから。そんなことに命をかけていなければ、いくら高級な魔法使いとはいえ、そう頻繁に人間を食べる必要なんてないわ」

そうだったのか。どおりできれいに見えるわけだ。

ん？ だけど夜の魔法使いだけじゃなくて、ユリアや桜もきれいに見えるのはどうしてだろう？ もともとなのかな？ うらやましいな。

ユリアが続けた。

「まあ、かく言う私も子どものころ、見た者を魅了する魔法をかけたんだけど、まだ効果が残っているみたいね」

む、そうだったのか。

桜が言った。

「へえ、そうだったの？ 毎日化粧する手間省けて便利じゃない。私にも教えてよ、その魔法」  
ユリアは桜の顔を見つめ、不思議そうな顔で言った。

「桜はもうかかっているように見えるけど？ 初めて会ったときから」

「えっ、かけてないよ」

ユリアは人差し指を伸ばし、ちゃんと桜の頬に触れた。

「かかっているけど？」

「えっ、うそ？」

自分の頬に触れた桜は、腑に落ちないという顔をした。

ユリアが言った。

「かけた覚えはないの？」

「うん」

「じゃあ桜のお母さんが、桜が子どものころにかけてくれたんじゃない？ 質にもよるけど、一度かけると効果はしばらく持続するから。自らを美しく見せる魔法は結構な技量を要するから、混血の桜が自分でかけるには難しいという配慮だったんじゃないかしら」

「そっか。ありがたいわね」

嬉しそうな顔をする桜。

うらやましいぞ桜。私もそんな魔法かけてほしい。

私は身を乗り出して言った。

「ねえユリアさん、私にもその魔法かけてもらえませんか？」

「あら、残念だけど普通の人間にかけても意味ないんやねー」

がーん。

桜が言った。

「いいじゃない。桜はもともときれいなんだから」

「そやよ」

とユリア。

そんな会話を弾ませるうち、車窓からは私の両親の経営する畑が見えてきた。

見渡すばかりのラベンダー畑に、ユリアは目を輝かせていた。

私の車に乗って、私たち三人は私の両親が経営する花屋の畑にやってきた。ユリアは車から降りるやいなや、近くのラベンダーに駆け寄っていき、じっくりとその品質を確かめていた。

花の一つ一つに顔を近づけ、じっと見つめて歩くユリアに私が言った。

「どうです？ お気に召しますか？」

ユリアが気に入ってくれることを願う。私はここにあるラベンダー以外提供できないから、もし気に入ってくれなければ、ユリアの助けを借りて生き延びる計画は白紙に戻ってしまう。

不安そうに見つめる私に、ユリアが言った。

「一つ味見させていただいてもよろしいですか？」

あ、今度は標準語だ。方言以外も話せるらしい。

「ええ、どうぞ」

私がそう言うと、ユリアはその恐ろしいほど細長い指を、一輪のラベンダーの茎にからませ、

「よいしょ」

引っこ抜いた。

パラパラと根っこから土が落ちる。ユリアは花を顔に近づけて匂いをかいだあと、花の部分を食べ始めた。

あ、生で食べるのか。

ユリアが花の部分をすべて食べ終えてしまうのを、私は呆然と眺めていた。

ユリアは花を食べ終わると、私に向き直り、

「うん、おいしいやねー」

混ざってないか？ 標準語と方言。

私は指摘すべきか戸惑っていると、ユリアは次のラベンダーを引っこ抜き、むしゃむしゃと食べ始めた。

桜が言った。

「ちょっと、あとは千鶴を救ってからにきなさいって」

「はひ」

花びらを頬張ったまま、頷くユリア。手にしていた花をすべて食べ終わると、私に言った。

「無農薬栽培のようですね。品質は申し分ありません。千鶴さん、本当にあなたをお救いすれば、ここにあるラベンダーをすべてべいいただけるのですね？」

「ええ」

頷く私。高々数ヘクタールの花で命が助かるなら安いものだ。

「わかりました。では、あなたに力を貸しましょう」

にっこりと微笑み、ユリアが言った。

よかった。夜の魔法使いに捕まったときはどうなることかと思ったが、私にも希望の光が差してきたようだ。

桜が言った。

「よし、これで契約は成立ね。さっそく千鶴を救う作戦を考えましょう」

車に戻った私たち。助手席に乗った私が運転手に再び学校に向かうよう指示し、走り出す出す車。

広がる畑の間を風を切って走る車の中、桜が言った。

「あなたが呪いを解除できない以上、千鶴を救うには夜の魔法使いを殺害し、呪いの効力を失わせるしかないと思うんだけど、あなたはどう思う？」

ユリアは少し考えてから、

「そやねー。私も夜の魔法使いとは相對したことがないので、どれほどの能力が分かりませんが、一般に伝えられるところの強さを有しているなら、殺害は困難だと思います。しかし殺害は不



可能にせよ、こちらの戦力を示すことにより、千鶴さんの呪いを解かなければ痛手を被ると思わせ、呪いを解かせるのがよいかと」

「そうだね、最初はその戦法でいこうか。ところで夜の魔法使いは黒猫嫌って魔術辞典に書いてあったけど、本当かしら？」

「たぶん本当やね。一説によれば、一七世紀前半のヨーロッパで起こった魔女狩りにおける黒猫の虐殺は、夜の魔法使いが人間を扇動して起こしたものだそうよ。夜の魔法使いの黒猫嫌いは尋常じゃないわ」

そうだったのか。黒猫もいい迷惑だ。

「だけど、どうして夜の魔法使いって黒猫が嫌いなんですか？」

私は黒猫もかわいいと思うけど。

桜が言った。

「何となく不吉な感じがするからじゃないの？ 真っ黒だし、やわらかいし」

いや、やわらかいのは関係ないだろう。

ユリアはその細長い人差し指を口元に当てて、

「人の好みはそれぞれやから。ひょっとしたら昔かみつかったことがあるのかもしれませんが。とはいえ私には、さして害のない小さな虫を嫌悪する人間も不思議に思えるのですが……」

それもそうだけど。

桜が言った。

「じゃあ、黒猫持って行くといいかもしれないわね。持っている限り不用意に接近されないわ」

「そやけど、夜の魔法使いの攻撃の主力は魔弾やそうやから、向こうから近づいてくる可能性は低いんじゃないかしら。むしろ接近した方が魔弾の利用を封じられへん？」

魔弾って何だろう。魔法的な弾丸ってことかな？

「じゃあこういうのはどう？ 一人が教会の一方から中に黒猫を放ち、飛び出してきた夜の魔法使いを、反対側の出口で待機していた他方が刀剣で迎え撃つの」

「そりゃええな。ほな、黒猫を用意せなあかんですね」

「あ、黒猫のいるところなら知ってるよ」

私が言った。

天気の良い日には、昼休みに校舎の裏側にいる猫たちに弁当を分けることを楽しみにしていた私は、校舎の裏側に何匹か黒猫がいることを知っていた。いつも弁当をお裾分けしているお礼として、力を貸してもらうのも悪くないだろう。

「どこ？」

桜が言った。

「校舎の裏側だよ。三匹くらいいたはず」

「捕まえるものを用意せなあかんですね」

とユリア。

桜が言った。

「それって大人しいの？」

「うん。……というか、あまり運動しない感じね」

校舎の裏側にいる猫たちはとても大人しく、私が抱っこしても文句一ついわない。天気の良い日はいつもそこにおり、寝っ転がったまま暇そうにあくびをしている。

「じゃあバケツに入れて持っていけばいいかな？ 華道部にあるわよ」

「うん、たぶん大丈夫」

学校に着いた私たちは、いつも授業で使っている校舎の裏側に向かった。昼過ぎということもあって、多くの猫たちが寝っ転がっていた。

私は来る途中に買って来たキャットフードの缶を取り出し、ふたを開けて猫たちの中心においた。すると、今まで眠っていた猫たちがむくりと起き上がり、缶を取り囲んだ。真剣な眼差しでキャットフードを頬張る猫を見つめながら、桜が言った。

「へえ、こんなところに猫いたんだ」

「ええ、入学したときからいたわよ」

昼休みにここにいる猫にえさをやりに来る生徒は、私を含め三人ほど。

缶詰に集まって来た猫のうち、黒猫の数を数えてみると三匹だった。だがよく見てみると、そのうち一匹はお腹の部分が白かった。

私がユリアに言った。

「白が混ざってるのあるけど、大丈夫かな？」

ユリアは首を振った。

「いえ、伝えられるところによれば、夜の魔法使いが嫌がるのは真っ黒な猫だけ。ちょうど二匹いるようですし、これで十分でしょう。いざというときにいなくなっていると困りますから、今のうちに確保しておきましょう」

猫が缶詰を空にするのを待った私たちは、華道部から持ってきたバケツを二つ、それぞれ黒猫の近くにおいた。

そして私が後ろからそっと忍び寄り、一匹の黒猫を抱き上げてバケツに入れた。すると、猫は大人しくバケツの中に収まってくれた。

お、よかった。

続けて、もう一匹の猫もバケツに入れる。今度の猫も大人しくバケツに入ってくれた。

「よしよし。いい子ね」

私は一方のバケツの中でまるまる黒い毛玉をなでてから、バケツを持ち上げた。もう一方のバケツを桜が持ち、華道部へと向かう。

華道部についた私たちは、とりあえず猫を室内においたまま、作戦会議を始めることにした。

私の生きられる残りの日数が限られていることを考慮し、桜はできる限り早く夜の魔法使いのもとに行くことを主張。ユリアもこれに同意した。

だが、夜の魔法使いは簡単に交渉に応じる相手ではないと考えられるため、どのようにして私

の呪いを解かせるかが問題となった。

桜は、まずは三人で教会に押しかけて行って、夜の魔法使いに呪いを解くよう求め、応じなければ武力で制圧し、呪いを解かせることを主張。

だがユリアは、夜の魔法使いが相手であれば、不意打でない限り打撃を与えることは不可能で、むしろ返り討ちにされる危険があると述べ、奇襲攻撃を主張。

二人の議論が五分ほど続いた挙げ句、ユリアの主張どおり奇襲作戦をとることになった。

次に、どのように奇襲を行うかが問題となった。そして、これもユリアの提案通りに決まった。

まず、桜が教会の玄関付近で身を潜めて待機。私とユリアが猫を持って教会の後ろに回り、窓などから黒猫を中に入れる。そして、すぐに教会の全面に引き返し、ユリアは玄関の真正面に待機。私は桜と同じく玄関付近で待機。

放たれた猫に気づいた夜の魔法使いたちが教会から飛び出してきたところで、教会の真正面にいたユリアが魔弾を発射。

魔弾というのは魔法使いが用いる基本的な遠距離の攻撃手段だそうで、体力すなわち魔法使いにとっての魔力を弾丸のように体外に放ち、敵に当てるものを言うらしい。

そして、突然の攻撃によって動揺した夜の魔法使いたちを、玄関脇に潜んでいた桜と私が刀剣で攻撃。ユリアもこれを援護し、夜の魔法使いたちを観念させる。

本来ならば魔法使いでない私を戦闘に参加させるべきでないが、ただでさえ強力な魔法使いが二人も相手という状況に鑑み、私も戦わなければならないというのが桜とユリアの一致した意見だった。

ただ、少しでも私が魔法使いと対等に戦うことができるよう、ユリアが事前に私に魔力に耐えられる力、魔力耐性を持たせる魔法をかけてくれるという。

刀剣は大抵の魔法使いは持っているらしく、桜も持っているそうだが、持っていない私はユリアが魔法で作ったものを利用させてもらうことになった。

そして作戦の日時は、私の寿命が残り少ないため、失敗した場合に出直す日数を考慮し、今日の深夜となった。私の提案で、夜までの間は私のうちで過ごすことになった。

作戦を立て終えた私たちは、猫の入ったバケツを持ち、私の家へと向かうため、部室を後にした。

夜十一時を回ったころ、私たちは作戦決行のため、丘の教会に向かうことにした。

私の部屋の中には、私の他に桜とユリアの二人と、バケツに入った二匹の黒猫がいる。

ユリアは私に魔術耐性を持たせる魔法をかけるため、目をつむって立つように言った。私と言われたとおり目をつむって直立すると、後ろからユリアの凜とした声が聞こえてきた。

「Anfaenge, es verlo, verstaer!」

その直後、私は自分の身体が少し温かくなったように感じた。

ユリアの声が聞こえる。

「はい、もういいですよ」

目を開ける私。視界に入ってきたのは、いつも通りの部屋と、心配そうに私を見つめる桜の顔。

私は振り返ってユリアを向いた。

「えっ、もうできたんですか？」

「ええ、今は通常の状態よりも、魔弾をはじめとする魔法による攻撃の効果が多少軽減されるようになっています。もっとも、剣で切られるといった魔法とは直接無関係の攻撃には効果がありませんし、魔法による攻撃の効果をすべて減殺できるわけではありませんから、過信しないでください」

ほほ笑むユリア。

桜が近づいてきて、私の身体をまじまじと見つめた。

「ふ〜ん、よくできてるじゃない。ここまできめ細かく編まれた魔法は見たことないわ。千鶴の呪いを除いては」

どうやら魔法使いにはかけられている魔法の品質が理解できるらしい。

桜が続けた。

「さ、次は千鶴が使う剣を作ってあげて」

「そやね」

ユリアはそう言うと、静かに目をつむった。そして片方の手を上に上げ、

「Anfaenge, xade von sacrif!」

ユリアの手に、稲妻のような閃光が走る。次の瞬間、振り下ろされたユリアの手には、手の移動した奇跡と重なる形の剣が握られていた。

わずかに湾曲した、両刃の剣。その切っ先は鋭く、端で見ている私でさえ恐怖を覚えるほどの攻撃性が感じられる。生命を殺傷することのみを目的とし作られたそれには、恐ろしいほど無駄が感じられない。その完成された形状の美しさに、呆然と見とれていた私は、ユリアがその剣を差し出すのにも気づかずにいた。

「千鶴さん、どうぞ……」

戸惑った顔のユリアが言った。

「あ、はい」

剣を受け取った私は、その羽のような軽さに驚いた。

ユリアが言った。

「千鶴さん華奢そうなので、なるべく軽く作ってみました。いかがですか？」

試しに振ってみる私。その鋭い剣は空気抵抗をあまり受けず、またとても軽いため、非力な私でも十分に振り回すことができた。おそらくアルミニウムで同じものをつくっても、これほどの軽さにはならないはずだ。魔法恐るべし。

「うん、問題ないわ。ありがとう」

私が剣を下ろすと、桜が私の手にしてる剣に顔を近づけ、じっくりと眺めた。

「ちょっとユリア、軽いのはいいけど強度は大丈夫なの？ 折れそうじゃない」

「そやね。軽さを重視して作ったから、強度はそれほどでもないです。夜の魔法使いの剣の技量にもよりますが、四、五回の撃ち合いなら耐えられると思います」

「えっ、それじゃ危くない？」

と桜。

確かに心配だ。

「せやけど、そもそも重くて夜の魔法使いとの撃ち合いについて行けなかったら意味がないでしょう」

それもそうだ。夜の魔法使いの並々ならぬ俊敏さは、実際に素手で戦った私がよく理解している。剣を持ったところで敵う保障はないが、魔法使いの持つ剣が重く、その俊敏さが少しでも鈍れば、少しは対等に戦えるかもしれない。

私が言った。

「桜、いいわこれで。壊れる前に勝負を決めるしかないわ」

万一壊れてしまったら、魔法使いでない私に次の手段はない。失敗は許されない。

桜が言った。

「わかったわ。じゃあ行きましょうか」

黒猫の入ったバケツをユリアと桜が手分けし手持ち、私たちは魔法使いとの決戦のため、丘へと向かう車に乗り込んだ。

静まりかえった夜。丘の教会へと続く道を、一台の車が上っていく。

魔法使いに気づかれないよう、すべてのライトを消してある。わずかな月明かりだけを頼りに、徐行していく車。

今日はどういうわけか、頭上の月がひときわ大きく見えた。それはまるで、空高く輝く月が私たちを応援するかのよう。

助手席の私は、膝の上で丸くなる猫をなでていた。猫は大人しく車に揺られながら眠っている。後部座席に座る桜の膝の上の猫も眠っているようだ。世話がかけなくてよかった。

丘の上に到着した車。車から降りた私たちは、トランクからバケツと剣を取り出した。そしてバケツに二匹の猫を入れると、私は運転手に帰るように言った。無関係な人間に迷惑はかけたくなかったからだ。

心配そうな顔をした運転手は、車をターンさせ、丘を下っていった。

一方の私とユリアは、猫の入ったバケツを持って教会の裏側に回った。猫を中に入れるのに都合のよい窓がないかと捜していると、

「にゃあ」

突然、私の猫が鳴いた。

驚いた私は口に指を当てて、

「ちょっと、静かにしてて」

ここで魔法使いに気づかれたら作戦が大なした。新たな作戦を考えて出直す余裕など私たちに

はない。

私は猫が不安がらないよう頭をなでながら、先に行くユリアの後に続いた。

しばらく進んだところで、ふと足を止めたユリア。暗がりの中、私がユリアの視線の先に目を凝らすと、換気用と思われる小さな窓があった。

だがどうやって開けよう？ 下手に割ってはガラスが飛び散り、中に入れた猫がケガをするおそれがある。私が戸惑っていると、ユリアはその細長い人差し指をちゃんとガラスにあて、

「Katzeglass, faette zu Wasser!」

呪文を唱えた。

すると、窓枠にはまっていたガラスがくしゃりと水飴のように柔らかくなったかと思うと、次の瞬間、水になってぴしゃりと飛び散った。

おお、すごい。

驚いている場合ではなかった。ユリアは私の耳に口を近づけると、

「魔法の防犯装置が作動したおそれがあります。急いで」

ユリアは自分のバケツから首根っこをつかんで猫を取り出すと、ぽいと窓の中に投げ入れた。

おっと、もう少し優しく入れてくれ。私が生きて帰れたら、回収して元の場所に返すのだから

。

私も自分の猫を中に入れると、すでに教会の正面へと駆け出していたユリアの後に続いた。

私が教会の前につくと、そこには正面ドアの脇で剣を構える桜と、教会から離れた崖のあたりでドアに向かって立つユリアの姿があった。

私は置いておいた自分の剣をとり、桜は反対側の教会の側面に身を潜めた。

息を殺して待つこと五分。突然、教会の中から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃ————っ！ クロネコっ！」

猫が発見されらしい。

夜の魔法使いは黒猫を見ると逃げるらしいから、恐れをなした夜の魔法使いたちが教会の外に出てくるのも時間の問題だ。

上がる脈拍、震える手。教会の前で待つ桜とユリアにも緊張が走る。

私は剣の柄を握りなおした。

その時、ばんっと音を立て、勢いよく教会の扉が開いた。そして、二人の夜の魔法使いが飛び出してきた。

それが、戦闘開始の合図だった。

まっすぐに夜の魔法使いに向けられたユリアの指先に、蒼白い光りが灯る。それは周囲の空間を飲み込み、バレーボールくらいの球になった。そしてユリアが短く呪文を唱えた瞬間、光りの球は夜の魔法使い目がけて飛んでいった。

それが音速を超える速度なら、躲わせる道理はない。息を切らず無防備な妹の魔法使いに、直撃する光りの球。

大きな爆音と閃光。攻撃を受けた魔法使いがよろめくのが見える。これが魔弾と言われる武器の威力だろうか。

ふらつく妹の魔法使いに、切りかかる桜。そうして驚くほどあっさりと、妹の魔法使いはその場に倒れ伏した。

おっ、やった。

だが安心してはなかった。桜が妹の魔法使いを倒している間に、姉の魔法使いの放った光りの球がユリアに向かっていった。瞬時に放たれたというのに、姉の魔法使いの魔弾はユリアの魔弾の数倍の大きさ。まるでライオンのように、轟音を上げながらユリアに襲いかかる。

ユリアの細長い手が、向かってくる魔弾に伸びる。ユリアが呪文を詠唱すると同時、ユリアと魔弾との間に、ガラスのような透明の半球が生じた。

だがぶつかる魔弾に、半球は一瞬にして砕け散った。そして横に飛び退こうとするユリアに、直撃した魔弾。

はじき飛ばされたユリアは、谷の縁まで転がっていった。ぴくりとも動かないユリアの身体。焼け焦げた肌や服が、夜の魔法使いの魔弾の威力を物語っていた。

身震いする私。魔法使いのユリアでさえ耐えられなかった魔弾に、生身の人間である私が耐えられるわけがない。本来なら私がここで加勢することになっていたのだが、足がすくんで動かない。

姉の魔法使いが魔弾を撃った一瞬の隙を狙い、一足で間合いを詰める桜。振りかぶった剣を、目にもとまらぬ速さで振り下ろす。

おっ、倒せそう。

だが剣先が魔法使いの身体に触れようとした瞬間、魔法使いは後ろに飛び退くと、さらに宙返りして二メートルほど間合いをとった。

魔法使いが片手を振ったかと思うと、次の瞬間には、その手には剣が握られていた。私や桜が手にしているのと違い、大きく湾曲した片刃の剣。

魔法使いは桜の接近を牽制しながら、

「何者だ」

怒りのこもった声で、睨みつけた。

桜はその視線を敢然と受け止め、凜とした声で言った。

「あなたがたが私の友達にかけた呪いを解いてほしいのです」

魔法使いは少し驚いた顔をした。だが、すぐに元の表情に戻ると、

「なるほど。だから私はあの人間を帰すことに反対したのです。もっとも、ああなっては自業自得ですが」

横目で倒れた妹を見る姉の魔法使い。妹の魔法使いの周囲は血の海になっていた。

だが、私の手にはまだ呪いの印が残っている。呪いをかけた魔法使いが死なないと呪いは解けないため、まだ息がある証拠だろう。

「大人しく呪いを解くならば、命は助けましょう」

桜が言った。

しまった。桜は私に魔法をかけた魔法使いが、既に桜に斬りつけられ、死にそうな方だと気づいていない。桜は私にかけられた呪いを評価していたから、それほどの魔法が使える魔法使いが

あれほど簡単にやられると思ってないんだ。

どうやって桜に既に倒れた魔法使いにとどめを刺すよう伝えよう？　ここから桜に手で合図するのも手だが、桜の視線に気がついた姉の魔法使いが私を攻撃する可能性もある。

桜の言葉を聞いた魔法使いは、片手を口に当てて笑い出した。

「あははは。命の心配をするのはむしろあなたでしょう。我々夜の魔法使いの屋敷に黒猫を放っておいて、生きて帰れるとお思いですか？」

そう魔法使いが言い終わるか言い終わらぬうちに、間合いを詰めた桜が剣を振り下ろす。

軽やかな金属音とともに、弾かれる桜の剣。桜の攻撃を防いだ魔法使いは、目にもとまらぬ速さで反撃に出た。魔法使いの湾曲した剣が、光速を以て桜に襲いかかる。

即座に後ろに飛び退く桜。逃げ遅れた桜の長い髪が、切り落とされる。

間合いを詰める魔法使い。奔流のごとく続けざまに繰り出される魔法使いの剣を、桜は必死に捌いていく。

「見たところ魔法使いと人間との混血のようですね。食料としては悪くありません。例の人間もどこかに隠れているでしょうし、一緒にいただくとしましょう」

余裕の言葉遣いを見せる魔法使いとは対照的に、剣を捌く桜の表情は苦しい。

桜を圧倒する夜の魔法使いの剣技。遠距離に比べ接近戦ならまだ対等に戦えると考えていたが、誤算だったようだ。

大きく振りかぶり、振り下ろされた夜の魔法使いの剣。自らの剣でそれを防御した桜は、衝撃を殺しきれずに大きく後ろに跳ね飛ばされた。

地に倒れ伏し、苦痛に顔を歪ませる桜。そんな桜に向け、魔法使いはすっと手を伸ばす。

まずい。魔弾を打つ気だ。あんなのをまともに受けたらひとたまりもない。

次の瞬間、私は夜の魔法使い目がけ突進していた。魔法使いの前方がぱっと明るくなるのが見える。魔弾の発射まであとわずかだ。

「えいっ」

走っている間に合わない。そう直感した私は、手にしていた剣を魔法使い目がけて投げつけていた。やり投げの槍のように一直線に飛んでいく、ユリアの魔法で作られた剣。

桜にとどめを刺そうとする魔法使いの無防備な背中に、剣があと一メートルで届くというとき、突如として振り返った魔法使い。まるで背中に目がついているかのように、くるりと反転した魔法使いは、指先の小さな光りの球を、瞬時に剣目がけて放った。

魔弾に触れ、一瞬にして蒸発する剣。そして剣だけでは飽き足りないのか、その後ろの私目がけ、魔弾は突き進んできた。

避ける間もない。私の身体に触れ、爆発する魔弾。私は自分の身体が宙に舞うのを感じた。ああ、頭上に見える月がやけに大きい。

地面に落ちた私は、全身が痛くてたまらなかった。目の前は真っ暗。自分がどの程度傷ついているのかさえ把握できない。だが、意識があるということは生きている証拠。私は痛みを堪え、上体を起こしてみた。

魔弾は胸の辺りで爆発したのか、服が焦げていた。だが身体には耐え難い痛みとわずかな出血



以外、支障はないようだった。ユリアが魔力耐性の魔法をかけてくれたのと、夜の魔法使いが身を守るために急遽未完成の魔弾を放ったためのようだ。ありがとう、ユリア。

魔法使いはあらためて桜に向き直り、第二の魔弾を放とうとしていた。

ああ、もうだめだ。

今にも放たれようとする魔法使いの魔弾。先ほどの小さな未完成の魔弾とは違い、今度は十分に大きくなっていて。これほど大きな魔弾の直撃を受ければ、桜といえど命はないはずだ。

だが魔弾が魔法使いの指を離ようとした瞬間、他の魔弾が魔法使い目がけて一直線に進んできた。

襲いかかるが魔弾なら、迎え撃つも魔弾。魔法使いは瞬時にくるりと向きを変えると、襲いかかる魔弾目がけて、自らの魔弾を放った。

だが魔法使いの指を離れた魔弾は、十分に魔法使いから離れないうちに、他の魔弾に直撃された。これ以上ないほど強力な魔弾が、魔法使いの至近距離で爆発する。

よろめく魔法使い。雪のように白かった肌が焦げているのが見える。

剣を杖に身体を支える魔法使いの睨みつける先には、ユリアがいた。崖の縁に立つユリアは、肌こそ焦げていたが、凜とした眼差しで魔法使いの視線を受け止めていた。

よかった。生きてた、ユリア。

だが安堵している場合ではない。夜の魔法使いはすぐに次の魔弾を放とうと、ユリアに手を向ける。

私は咄嗟に、近くにあったバケツの一つを取り、

「ていっ」

思いっきり、夜の魔法使い目がけて投げつけた。

魔法使いに対抗しようと、次の魔弾を撃つため手を構えるユリア。夜の魔法使いに、私の投げたバケツに構っている暇はなかった。

こつん。

緩やかな放物線を描きながら飛んでいったバケツは、指先に大きな魔力の塊を生じさせている魔法使いの腰に当たった。

だが夜の魔法使いは無視。ユリアが放とうとする魔弾を打ち落とそうと、魔弾の生じた手を前方に向けたままだ。

私は次のバケツを取り、

「ていっ」

投げつけた。

その瞬間、魔弾を放ったユリア。そして、同時に魔弾を放つ夜の魔法使い。

放たれた二つの魔弾は急接近し、両魔法使いの中央で爆発が起こった。そして、爆煙の中から現れたのは、夜の魔法使いの放った魔弾。

そして、その魔弾はユリアの魔弾を消滅させたに飽きたらず、轟音を放ちながらその先のユリアに襲いかかった。

その時、山なりの軌道を描くバケツが魔法使いの頭に直撃。一瞬ふらついたように見えた魔法

使いは、すぐに体勢を立て直した。

同時に、丘の縁の方で爆発音がした。見れば、炎に包まれたユリアが衝撃で崖の下へと落ちていった。崖の高さは相当なものであり、助かることがないのは明らかだった。

私に向き直った夜の魔法使いの、ぴんと伸ばされた指先が光るのが見える。それが魔弾の光りであるのは明らかだった。

ああ、もうだめだ。

桜は倒れ伏したまま。ユリアも、ユリアの作ってくれた武器も失い、呆然と立ちつくす私。あと数日の寿命だったとはいえ、恐怖で涙がこみ上げてくる。

「焼き尽くしてくれる」

怨嗟のこもった声。魔法使いの指先に生じた光りの球は、すでに魔法使いの身長ほどになりかけていた。人間一人殺すのにこれほどの大きさは不要なはず。その不必要なまでの大きさに、魔法使いの私に抱く怒りの大きさが感じられた。

「死ね」

魔法使いの指から、今にも魔弾が放たれようとする。

死を覚悟し、目を閉じる私。せめて痛くないよう、一瞬で天国に行けますように。

すると、

「にゃあ」

ちょうどその時、どこかで聞いたことのある鳴き声が聞こえた気がした。

数秒の間、魔弾が飛来することもなく、不気味な沈黙が続いた。

ん、どうしたんだろう？

私が恐る恐る目を開けると、そこには真っ青な顔をした夜の魔法使いと、教会のドアから出てきたと思われる二匹の黒猫がいた。

いつも学校で生徒たちにえさをねだるときのように、夜の魔法使いの脚に頬をこすりつけている黒猫たち。

そういえば昼間に餌をあげてから、ずっと何も食べさせていなかった。

凍りついたかのようにその場に固まる夜の魔法使い。ただでさえ白い肌が、ますます色を失っていく。

そしてそのわずかな瞬間に、残された力を振り絞って起きあがった桜が、夜の魔法使いをばっさりと斬りつけた。

体勢を崩す魔法使い。巨大な魔弾の塊は消滅し、魔法使いはその場に倒れた。

魔法の効力は、魔法使いが死ぬと失われる。魔法で作られた魔弾が消えたということは、夜の魔法使いが絶命したと見ていいだろう。

よかった。

安堵のあまり、その場にへたりと膝を折った私。

駆け寄ってきた桜が、私に抱きついた。その場に横になる私と桜。

私の髪をなでながら、桜が言った。

「よかった、助かって」

桜の頬を涙が伝う。

私も嬉しくて泣き出しそうだ。

だが、その前にやることがある。私の手の甲にある呪いの印はまだ消えていない。これは、呪いをかけた妹の魔法使いがまだ生きているからだ。私は涙を堪え、姉の魔法使いの後ろで倒れる妹の魔法使いを指差した。

「桜、あっち」

その言葉を聞いて、桜は私の指についた呪いの印に気がついた。

桜は立ち上がると、妹の魔法使いに近づいていった。その後続く私。

仰向けに倒れる妹の魔法使いの周囲は血の海になっていた。だがその胸はわずかに上下しており、まだ息があることをうかがわせていた。

とどめを刺そうと桜が剣を振り上げたその時、魔法使いが目を開いた。

「待って、呪い解くから……」

今にも消え入りそうな、蚊の鳴くような声。

桜は首を振った。

「その傷じゃ助からないでしょう。もっとも、夜の魔法使いなどという、きわめて珍しい品種を殺すのは惜しまれますが」

それだけ言うと、桜は剣を振り下ろした。魔法使いが何か企んでいるかもしれないし、桜の判断は悪くない。

破れた心臓から飛び散った血。

見れば、私の手の呪いの印は消えていた。

桜が呪文を唱えると、桜の手に使っていた剣が消滅した。桜は私に向き直ると、私の手をとった

。呪いの印が消えていることを確認した桜は、私にほほ笑んで言った。

「よかった」

「ありがとう、桜」

桜を抱きしめる私。桜の後ろに、大粒の涙が落ちる。

私を抱きしめる桜の嗚咽する声が聞こえた。

吹きつける風は冷たく、開け放たれた教会のドアがかたかた音を立てていた。

そのまましばらく抱き合っていた私たちは、頭上に光る月に見守られて丘を下った。

それから三年の歳月が経った。

中学校を卒業した私は、進学のため都会に引っ越していた。今は桜と同じ高校にいる。

かつて夜の魔法使いとの戦いで私を救った二匹の猫たちは、今や私の大切な家族になっていた

。私は毎年欠かすことなく故郷に帰り、あの教会のある丘を訪れていた。私を守って死んだ魔法使いに、実家の畑でとったラベンダーの花束を手向けるために。